



## ばんそうこう 絆創膏

【新潟県】中島 由美子 49歳

保育園の看護師として働いていた頃、私は園児たちから「中島先生」と呼ばれていた。これまで高齢の患者さんが多い病棟で働いてきたので「先生」と呼ばれることや手遊び歌を一緒にする時間は少し恥ずかしい。そして幼児は転んでよくけがをする。傷口を洗い流し水分をふき取り絆創膏を貼ると「先生、ありがとう」と返してくれる笑顔に癒される。

ある日、5歳児の担任から電話があった。「中島先生、リコちゃん（仮名）が教室で転んで足を痛がっているのでもらえますか?」。リコちゃんはよく転ぶ子の一人だった。私はウサギ柄エプロンのポケットに絆創膏を入れ、小走りで教室に向かった。

給食を食べ終わり午睡のため布団がずらりと並べられている。リコちゃんは離れた場所で見ると、表情はゆがむが痛いと言わない。腫れもないし内出血もない。しかし、すぐウトウトしてしまう。（お昼寝しない子なのに、おかしい。いつもと違う）

私は救急車を呼ぶ決断をした。救急車が到着し状況を伝えると隊員が言った。「転んだくらいで呼んだの? 見たところ足に腫れもないし、きれいな足ですよ」。

「いつもと様子が違うのです。意識も朦朧としていて、シヨック状態なのかもしれません」

「えーっ? 眠いだけなんじゃないの? 今、昼寝の時間なんじゃないの?」

私はよほど怖い顔をしていたのだろう、救急隊の表情が怯んだ。救急隊は優しく声を掛け、足を固定し担架にそとと乗せてくれた。

「中島先生、絆創膏貼って」。小さな手を差し出したリコちゃんの手首に絆創膏を貼ると、笑みを浮かべて再び目を閉じた。私は救急車に同乗し、祈りながらその手を握った。

診断は右下腿の骨折で、シヨック状態であった。

時に厳しく立ち向かわなければ、目の前の命を救うことは難しい。このできごとは、看護師としての私の原点となっている。